

「化学工学年鑑2014」の発刊にあたって

常 田 聡*

化学工学誌10月号では、毎年恒例となっている「化学工学年鑑」の2014年度版をお届けします。年鑑は、1998年から発刊されていて、ちょうど私が化学工学誌の編集委員を初めて務めたときに始まったので、よく覚えています。年鑑が始まる前は、「レビュー特集」という企画が時々生まれ、「蒸留」や「晶析」といった単位操作の一つ取り上げて、その分野の動向や新しい技術をレビューすることにしていました。その頃は、レビュー特集のアンカーパーソンと協力して、編集委員が苦労しながら執筆者の選定をしていたことを覚えています。一方、年鑑は、2000年から始まった部会制とも連動し、現在は6つの部会が基礎技術分野を、そして8つの部会が展開技術分野をそれぞれ担当し、70近くの細かい分野に分けて適切な執筆者を選定していただいています。執筆者には、各分野の国内外の動き、研究・技術動向、今後の展望をまとめていただいています。また、年鑑の冒頭には「化学工学一般」という枠を設け、化学産業界、教育、研究の動向が一目でわかるようになっていきます。本年鑑を執筆された方々や取りまとめにご協力いただいた方々にこの場を借りて改めて御礼申し上げます。

私も環境部会のメンバーを代表して何度か年鑑の執筆を担当したことがありますが、担当分野の最新情報を広く集めることは容易な作業ではなく、かなりの負担を感じたことを記憶しています。同じような声を多くの執筆者からいただきましたので、執筆者の負担軽減策の一つとして隔年での発刊に変更することを編集委員会の中で議論しました。しかし議論は決着せず、アンケートを通じて会員の声を聞き、判断することになりました。先月の化学工学誌にアンケート結果が掲載されましたが、年鑑については「有用であり、毎年必要である」という回答が最も多く32%、「有用であるが、毎年必要でない」という回答が次に多く30%という結果でした。読者のあいだでも意見が2つに分かれていることがうかがえますが、それでも約1/3の会員が年鑑を毎年読みたいと思っているのであれば、編集委員会はその期待に応えるべきであるということになりました。執筆者の方々にはご負担をおかけして申し訳ございませんが、引き続きお力添えのほどお願い申し上げます。

さて、年鑑の話題とは離れますが、せっかくの機会ですので、この場を借りて化学工学誌をめぐる最近の話題について紹介させていただきます。現在、化学工学誌の編集委員会は48名で構成されています。編集委員の選出母体は民間企業、大学、研究機関、部会、支部など様々です。前述

のアンケート結果において、「化学工学分野の情報を得る方法」の第一位は化学工学誌であり、その回答数は他の出版物や行事を大きく引き離していました。このような期待に応えるべく、編集委員会で企画を立てる際には、化学工学の分野としての大きな広がりがあること、産業界やアカデ



ミアという立場の異なる機関に所属する研究者・技術者がいること、学生会員からシニアの会員に至るまで幅広い年齢層の読者がいることを常に意識しています。現在、化学工学誌では、特集を約31ページ、シリーズ・連載ものを約18ページ掲載しています。以前に比べ、シリーズ・連載ものが増える傾向にあり、多いときは10種類のシリーズ・連載ものが誌面を飾るときもあります。この傾向は、編集委員会が幅広い読者層に満足していただくための誌面作りを目指したことの表れです。例として、来月以降に新たに始まる連載記事を2つご紹介します。まず、読者からの高い支持を受け単行本としても出版された「Excelで気軽に化学工学」(2004年7月～2005年11月および2011年8月～2012年5月)の続編が来月から新たにスタートします。私ごとで恐縮ですが、学部の講義で教材として使わせていただいていますので、続編を心待ちにしています。また、「エコノミクスエンジニアリング」という連載記事もスタートします。こちらは産業界の方々に高い支持をいただけていると思っております。

化学工学誌では、新たな取り組みとして、部会の存在感や活動内容を積極的にPRできる場を作ります。しかしながら、単なるニュースレター的な内容ではなく、現在直面している特定の課題に対する部会の取り組みを骨太な記事にまとめ、特集または小特集として掲載していく予定です。その第一弾として、粒子・流体プロセス部会の震災復興へのアプローチを来月取り上げます。掲載の際は、「部会発」の企画であることを前面に出し、部会の活動をPRするページも別途作る予定です。部会の皆様には年鑑の作成にあたってたいへんお世話になっていますが、今後はこの新しい「部会発」の企画においても是非ご協力いただきますようお願いいたします。

平成26年度年鑑編集WG

片岡 祥(産総研)、宮永一彦(東京工業大学)、橋爪 進(名古屋大学)、佐藤剛史(宇都宮大学)

*早稲田大学理工学術院 教授、平成25、26年度化工誌編集副委員長